

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Close-synonyms in present-day vocabulary

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西尾, 寅弥, NISHIO, Toraya メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001758

現代語彙における同義語

西尾寅弥

はじめに

小稿では、「同義語」という語を「同義的な類義語」という意味に、便宜的に使うことにしたい。

現代日本語を対象とする、類義語の研究は近年ようやく始まってきている。(類義語をもっぱら取り上げたものとしては文献1・2・3がある。)類義語のうちで一般にまず興味がひかれやすく、記述の対象としても取り上げられることの多いのは、「ゆれる／そよぐ」「さむい／つめたい」「いけ／ぬま」「戦術／戦略」というような、実質的な意味にかなりのくいちがいが明らかに存在するものであろう。このような類義語のあいだの共通面と差異面を明らかにすることは、単語の意味を他の語との関係の中で正確にとらえる上で、まちがいはなく役に立つものである。(外国人に対する日本語教育では実践的にも不可欠な知識である。)しかし小稿で対象にするのは、「去年／昨年」「つかれる／疲労する」「ベッド／寝台」のように実質的な意味はまったく、あるいはほとんど同じようにみえる「同義語」である。

最も基礎的な語彙の体系の中には、同義語はあまり存在しないかもしれない。しかし全国的に文字・文章を所有するようになった近代・現代では文章語も日常談話に流れ込む傾向があり、外来語もはらんが云々されるほど流入し、専門語や方言などもマスコミの発達も手伝って一般語になる傾向があるなど、国民生活の場における同義語の増加しそうな条件がいろいろ考えられる。筆者はいま同義語を認定するための客観的尺度を持っていないので、現代日本語における同義語を数量的に示すことができないのは残念であるが、けっして少ないものではないことはたしかである。同義語の問題は、現代語彙における二重性・重層性として、国語問題(国字問題ではないが)の一環でもあると筆

者には考えられる。同義語の存在の様相を、具体的にくわしく明らかにする努力は、現代語彙の全体的な姿を明らめ、今後のありかたを考える上にも必要の一側面であろう。

同義語の記述には、実質的な意味以外の面、すなわち感情的意味・文法的特徴・文体・位相・結語法・語種・音声形式・表記形式など、さまざまな方面におのずと目を向けざるを得なくなる。したがって、文体論・心理学・社会学などの他の広い領域にも関係が生じるはずで、困難な課題である。小稿は、いくつかの観点項目別にあげ、具体例によって考えてみるという試みに止まる。二つの項目に関係していることがらを述べるばあいには、どちらか一方の項目でのみ取り上げた。各項目で述べる内容には、個別な現象として記したものと、ある範囲の同義語の群にわたってパターンのみられる性質として記したものとがある。なお、具体例には名詞がわりあいに多くなったが、具体物をあらかず名詞などには、文脈・文例ぬきでも外界の物との対応などから、あまりスペースをとらないでも一応問題にできる語がわりあい多いからでもあった。

1 意味

1.1 指示的意味

語の意味とふつうに言うとき、まずそれは語のさす客観的な対象、その語によって切りとられる世界の区画と密接な関係がある。それは、指示的意味(referential meaning)・認識的意味(cognitive meaning)などとも言われ、そこにことばによる人間の相互理解が成立する基本がある。これは語の内容面の中核的な部分であり、相対的にはもっとも安定的な変わりにくい部分であろう。

「完全な同義語はあり得ない」とよく言われる。多義語どうしがすべての意味について同義的であることはめったにないことであろうし、同義的な語どうしが文体的な適切さの点から相互におきかえにくいことも多いし、一応おきかえられても微妙な感情的意味にまで差が生じないということはきわめて稀であろう。しかし、指示的意味だけに限って、多義語はその中の一つの意味だけを問題にするならば、同義の現象はけっして少ないものではなさそうである。

おむつ／おしめ パンジー／三色すみれ はいしや／歯科医 つく／到着する

のような語どうしは、文体的適切さや微妙なニュアンスなどを無視すれば、かなり多くの文脈・場面において一応交換可能であろう。こういう類を小稿では典型的な同義語と考え、さらにばあいによってはもう少し広い範囲（注1）まで含めて考えることにしたい。

1.1.1 指示的意味についての個別的な事例

わずかながら指示的意味に差のありそうな同義語のうちで、まず個別的とみられる事例の一つとして「さじ/スプーン」をあげてみよう。文献3の記すように、辞典が多く「スプーン」を洋風のさじと説明している、いま日常生活で使うのは洋風のさじだから、さじ＝スプーンである。ただし、アイスクリームに付いている小さい木のへらなどは「さじ」と言っても「スプーン」とは言えまいから、指示的意味について完全には一致しない同義語の1例であろう。

個別的な事例としてもう一つ、「婦人/女性」をあげてみよう。この2語は指示対象の範囲については年齢の上でも明らかな差はありそうには思われぬ。ところで、昭和37年に東京・千葉にある大学の男女学生112人に「女性向けの雑誌(A)/婦人向けの雑誌(B)」のどちらがより若い年齢層を対象にしている感じがするかと質問したところ、1人(女)を除いて他の全員(99.1%)が(A)に反応した。(文献1のp88~97)これは筆者の予想を上回る一方的な結果であった。単なる「感じ」にすぎないとしても、かなり人々の間に共通的に持たれている感じであるらしい。おそらくはなんらかの客観的な違いの、個人意識への反映であろう。2語の雑誌などにおける用例を検討すると、一応相互におきかえられるもののがかなりあり、「～解放」「～用」「日本～」など複合語の中でさえ2語ともはまりうるものが少なくない。もっとも「年配の婦人」「老婦人」「中年の婦人」などは多少とも「女性」におきかえにくい気もする。しかし、
○火葬されたお年寄りの女性のからだから手術用の鈕子(かんし)が出てきた。

(朝日新聞1973. 4. 30)

のような用例もないではなく、それを不自然な表現だと言えるかどうかともわからない。「女性」はわりあい若い層をさすことが多いとしても、それはあくまで傾向にすぎないであろう。このように、語のさし得る対象の範囲に明らかな違いは見出しにくい、じっさいに語によってさされることの多いもの、した

がって人々がその語から連想しやすいものについて、傾向的な差のある同義語のタイプが考えられるであろう。このことを「婦人／女性」の例について、次のように図示してみたい。



1.1.2 指示的意味と文体的特徴（文章語）との関係

つぎに、文体性・語種など、語彙のもつ他の側面との関係において、指示的意味にパターン的に微差のみられる同義語について考えてみよう。

まず、語の文体的特徴における対立と並行的にみられる指示的意味の傾向がある。昭和37年に大学生・社会人250人を対象とした質問紙調査の中で「(こわれたところを) 直す／修理する」の2語についていくつかの問を試みた。(文献1のP84～91) その結果を要約すると、「修理する」のほうが「堅い、形式ばったことば」と感じる、「修理する」のほうが「形がより大きいもの」「構造がより複雑なもの」をなおす感じがする、「直す」のほうが「かんたんになりそう」な感じがするという諸反応にそれぞれ90%以上ないし90%近くの人が集中した。また、具体的にどんなものを動作の対象として連想するかを書いてもらったところ、「修理する」からは機械・自動車・自転車・時計・ラジオ・テレビ・家屋などを、「直す」からはおもちゃ・衣類・棚・いすなどを連想した人が多かった。けっきょく、語の指示対象として「修理する」のほうが高度の技術・工程を必要とするものだという感じは、かなり一般的に持たれているのだろうと推測された。そしてそれは、「修理する」が堅いことば、言いかえれば文章語であることとかわかりあっているのであろう。(文献1のP94～96)

このように同義語のセットにおいて、文章語的なほうの語が著しいもの、注目すべきものをあらわす方向に微差のみられるものがかなりあるようだ。たと

えば「てがみ／書簡」において「書簡」は文学者・政治家などの著名人のてがみや公的なてがみなどに使われることが多いし、「誕生／生誕」において文章語的な「生誕」は「親鸞の生誕800年を記念して」のように、すでに死んでいる記念すべき人物にしか言わない傾向がある。

滝／瀑布 ふね／船舶 はし／橋梁 工場／工場 くじびき／抽せん 掃除／清掃
くさと／除草 しかえし／報復 仲直り／和解 まける／やぶれる

などにおいても、文章語的な右側の語は、小じんまりした滝、小舟、いなかの土橋、小さい町工場、あみだくじ、自分のへやのかたづけ、庭先の雑草とり、子ども同士のいざこざ、じゃんけんにまけること、などには使いにくい。やはり日常語はごく平凡な、ありふれたものをもさし得るのに対して、文章語は remarkable な対象に言及するばあいに多く使われ、したがって指示的意味もその方向に多少ずれる傾向があるのであろう（注2）。

1.1.3 指示的意味と文体的特徴（旧式語）との関係

カメラ／写真機 旅館／やどや バス／乗合（自動車） 帽子／シャッポ 卓球／
ピンポン 結婚式／婚礼 修理／修繕 未亡人／後家

などの右側の語のように、より新しい同義語に押され気味になり、オールドファッションになっている語を「旧式語」と呼びたい。（語の交替が完全に行なわれれば古い方の語は古語となり、同義語は生じない。上の例の中の「シャッポ」などはすでに古語とみるべきか。）旧式語は年齢の高い方でより多く使われている傾向があるようだ（注3）。

日本語では語の隆替がはげしいと言われるが、もしそうだとすればこの種の同義語が発生しやすい条件をそなえていることになる。「スラックス」に対する「ズボン」、「ベルト」に対する「バンド」などもやや旧式語になりつつあるのだろうか。

このタイプの同義語において、旧式語のほうの指示的意味に関しても、旧式なもの、やや現代的でないものをさすほうに片寄る傾向があるようだ。たとえば「写真機」は旧式なカメラを、「やどや」は近代的でない旅館を、「婚礼」はやや古風な儀式をさす傾向があるという風に。ただし、このあたりになると感情的意味とのかかわりも深いであろう。

1.1.4 指示的意味と語種（外来語）との関係

つぎに、外来語を含む同義語セットについて、ある程度一般的な、指示的意味の微差の傾向が指摘できるであろう。筆者なりに整理してみよう。

1.1.4.1 外来語のほうが洋風のをあらかず傾向

現代語彙における外来語の大部分は、英語をはじめとする西欧語からの借用であり、欧米の文物や思想とともに移植されたものであるから、在来からの語と外来語とが同義的關係になっているばあい、外来語のほうが洋風のをさす点に微差のみられるものがある。たとえば、

旅館・やどや／ホテル 台所／キッチン ふろば／バスルーム つえ／ステッキ
まえかけ／エプロン 日がさ／パラソル あんま／マッサージ 作法／マナー

1.1.4.2 外来語のほうが(非常に)局限されたものをあらかず傾向

外来語が、在来からの語のもつ意味領域の基本的なところには割り込めず、狭い特殊な範囲に限られつつ共存しているばあいがある。たとえば、

なまえ／ネーム 「ネームをつける」と言うとき、名づけをすることではなく、洋服・外とう・ワイシャツとかカバン・万年筆などの持ち物に持ち主のなまえを入れることである。(「ネームバリュー」のような複合語はいま別とする。)

あみ／ネット 「ネット」はふつうには球技と女性が結髪用に頭にかぶるあみ(ヘアネット)に限られるようである。漁網・焼き網などはふつう「ネット」とは言わないだろう。(文献1のp198)

ごはん／ライス 食堂で出される、皿に盛られたごはんに限って、「ライス」と呼ばれる傾向があるようだ。

空気／エアー 「エアー」は「エアーを入れる」「エアーを抜く」のように、圧縮された空気にかぎって使われる。(「エアコンディション」のような複合語の成分になるばあいは別。)

1.1.4.3 外来語のほうが、より加工的なものをあらかず傾向

在来からあるほうの語が、なまの状態に近いもの(食品)をあらかず、外来語のほうがより加工された状態のものをあらかずという傾向のみられるものがある。加工的なものは、あとから割り込みやすい意味領域だといえようか。

落花生・南京豆／ピーナッツ よく引かれる例であるが、「ピーナッツ」はから・うす皮を取り去って、バター・塩などで加工してあるものをさす傾向がある。(文献1のp71~79)

牛乳／ミルク 「ミルク」は喫茶店などでは、コップに入れ砂糖など加えて出されるものである。また、家庭では育児用の粉ミルクを「ミルク」と言い、生乳は「ミルク」とは言わない。「うちの子どもがこのごろやっ」とミルクから牛乳

になりまして」という家庭婦人の会話が聞かれたという。(文献5のP504) また、コンデンスミルクを単に「ミルク」と言うこともある。いずれにしても、「ミルク」は「牛乳」より加工的なものをさすほうに傾いているようだ。(もっともわりあい新しい傾向として、しぼったままの牛乳を「ミルク」という、英語に近い意味で使うこともあるかと思われる。)

いわし／サーディン 「サーディン」は小形のいわしの頭をきりおとし、オリーブ油に漬けてかんづめにしたものである。生のいわしや丸干しはけって「サーディン」とは呼ばれない。

1.2 感情的意味

指示の意味よりもとらえにくいものであるが、単語の指示する対象に対する感情・情緒・態度・評価などの主体的な要素が単語の意味内容として含まれているばあいがある。それを感情的意味と呼ぶならば、これは指示の意味と分ちがたい部分があり、また2にふれる文体的性質とも具体的に分離しにくい点がある。ことば自身に付属した感情的意味なのか、ことばのさす事物の喚起する感情なのか疑わしいばあいもある。しかし、指示の意味が(ほとんど)同一である同義語の記述にさいしては、感情的意味は重要な視点の一つにならざるをえない。

1.2.1 待遇的感情

まず、待遇的感情の違いを重要な1類としてあげることができる。

人／かた 父／父上 むすめ／おじょうさん えかき／画伯 いう／おっしゃる
みる／ごらんになる する／なさる 死ぬ／なくなる

などは、語のさす人やその行為などに対する尊敬の気持を含んでいる。絶対敬語の段階では、たとえば貴人の死は普通人の死とは別類の指示対象でありえたかもしれないが、相対敬語といわれる今日の敬語体系では「死ぬ／なくなる」は同一の死という現象に対する待遇感情的なとらえ方の区別によって対立しているとみてよいであろう。

わたくし／てまえ 家内／愚妻 もらう／いただく する／いたす
のようないわゆる謙讓語は、自分や自分側の者やその動作を低め、へりくだった気持で言う感情的意味が加わったものとみることができよう。

人／やつ きみ／きさま 女／あま 夫／宿六 子ども／がき 若者／若造 欧米
人／毛唐 かお／つら 虫／虫けら ちいさな／ちっぽけな 言う／ぬかす、ほざ

く 死ぬ／くたばる

などは、人・動物やその動作・性質をいやしめ、さげすむ感情の有無によって対立している。なお、この感情的意味を逆用して、非常に親密な感情の表現に使われることもある。「いやつだ」「しょうのないがきだ」などと親愛の情をもって言うばあいである。

次の 1.2.2 にも関係が深いと思われるが、職業・身分などをあらわす語に伴うさげすみの感じをさけて、言いかえ語が生じ、従来の語と共存して同義関係になるものがある。(文献1のP151~162)

百姓／農民 小使い／用務員 女中／お手伝い 消防夫／消防士

この類における特徴は、社会一般の人は左側の語じしんがさげすみの感じを伴っているとは必ずしも感じないのに、その語で呼ばれる当事者たちは強くそう感じる傾向があることである。その人々にとっては軽視されたという感情がおこる場面でその語がくりかえして経験されることから、マイナスの感情的意味が形成されるのであろう。これは日本人一般に共通的なものでないばあいは、語じしんの持つ性質だとは言い切れなくなるが、まったく個人的なものではもちろんなく、両者の中間にあるものと考えられる。

1.2.2 露骨な感じとその回避

対象がなんらかの望ましくない感じを伴っているばあい、それを露骨に直指することを避け、えんきよくなさし方をすることによって、望ましくない感じをやわらげるために生じる同義語の1類がある。これはどの言語にもあることであろうが、一般にはっきりと言い切る表現を避け、ぼかした表現を好む傾向の強い日本語では、単語の面でもこの類の同義語が生じやすいのではなからうか。「便所／はばかり／手洗い／洗面所／トイレ」などはこの要因から次々と同義語が分泌されていく例である。性に関係のある語には

性／セックス 月経／生理, メンス 妊婦服／マタニティドレス 売笑婦／プロステティテュート 強姦／暴行, 乱暴

など、この類の例がかなりありそうである。上の例にもみられるように、直指性をさける語の資源として外来語の利用されることがしばしばある。

また、身体的な欠陥や恐い病気をあらわす語についても、直指的な語感を

避ける言いかえ語が発生し、あるいは作られて、同義語を生じることがある。

めくら／盲人 つんぼ／ろう者 らい病／ハンセン氏病

1.2.3 外来語に伴う感情的意味

外来語と在来の語とが作りなす同義語において、外来語のさす対象のほうが高級そう、しゃれた感じ、すてきそう、というようなよい評価感情を伴う傾向があるようだ。

髪型／ヘアスタイル 耳かざり／イヤリング そでなし／ノースリーブ くだもの
／フルーツ なつみかん／サマーオレンジ 体重計／ヘルスマーター しゃがれ声
／ハスキーボイス 買い物／ショッピング

のような組において、指示的意味にも傾向差のありそうなものもある。たとえば、柿・いちじくなどの日本的なくだものは「フルーツ」とはあまり言わないとか、家の近くでの卑近な買い物は「ショッピング」とは言いにくいとかいうように。しかし、同一の対象をさすかざりにおいても、外来語のほうが魅力的な感じのものとして対象に言及しているという違いも、傾向としてあることはやはり否定できないであろう。そしてこれは、個別的な現象に止まらず、ある程度パターン化しているとみられる。

もっとも、上に述べたこととは反対に、非外来語のほうがむしろ高級なものの感じを獲得している例もあるようだ。

じゅうたん／カーペット デパートなどでビニール製のしきものを「カーペット」と呼んでいるので、「じゅうたん」のほうが豪華な高級なものという感じが伴うようだ。新聞の折り込み広告に「高級ジュータンから実用カーペットまで、一流メーカー品をワイドに取り揃え」という文句があったという。『言語生活』1972年11月「目」欄)

1.2.4 詩語に伴う感情的意味

感情的意味のパターン的なものの1類として、文体的に詩語・雅語（文章語の下位区分の一つと考えられる）とみられるような語が、ニュートラルな同義語に比べると、対象に対する美的感情などの情感を伴ったとらえ方をやどしている傾向がありそうだ。

おんな／おみな つばめ／つばくらめ うみ／わたつみ あわ／うたかた 月見草
／宵待草 とかす（髪を）／くしげずる まぶしい／まばゆい 永久に／とわに

このような感情的意味を伴った語を使うと、一応詩的な世界を作り出しやす

いにしても、ステレオタイプ化した表現技法に安易によりかかることになる危険も大きいのであろう。

1.2.5 旧式語に伴う感情的意味

1.1.3の終わりに一言ふれたように、「旧式語」はやや時代おくれな感じを伴ったものとして対象に言及する傾向があるだろう。このこととも関連するが、旧式語は時として親しみ・なつかしみ・実感の深い対象として言及する語でもあるようだ。より現代的な同義語に比べて、年輪の刻まれたなじみの深い語であり、最も現代的である規格にはまらない、やや距離のあることばであるところから生じる、一種の含蓄でもあろうか。それは必ずしも老人的な懐古趣味によって生じるものとは言えない。

映画/活動(写真) せっけん/シャボン アコーディオン/手風琴
などの右側の旧式語が、意識的に使われるようなばあいに見られよう。少し前に「夜明けの停車場」という歌謡曲があったが、現代的な「駅」と比べると上のような効果を発揮しているのであろうか。(この項にふれたことは、文体的効果としてみるべきところも大きいであろう。)

2 文体的特徴

語の意味は、客観的であれ主観的であれ語のさす対象にかかわるのに対して、語がどんな文章・場面で多く使われるかなどの、語じしんのもつ性質をここでは広く語の文体的特徴と考えることにしたい。意味は何が言われるかの問題であるのに対して、文体はいかに言われるかの問題であるとも言えよう。

2.1 日常語対文章語

同義語のなかには、日常語対文章語という文体的な対立としてとらえ得るものが数多く存在している。

とし/年齢 さつ/紙幣 口ぶり/口吻 病気/やまい 野菜/蔬菜 出版/上梓
早死に/夭折 もちにげ/拐帯 くさる/腐敗する くいちがう/齟齬する 勉強
する/まなぶ まかせる/ゆだねる 清書する/浄書する しつこい/執拗な
けちな/吝嗇な 貧乏な/まずしい うすい/あわい 有名な/著名な いつも/つ
ねに まえもって/あらかじめ 大体/おおむね

のようなものをその例とみるが、こういう類は相当多数にのぼることはたしか

である。この類の中には、語種の区別からいうと和語対漢語のものが多いが、反対に漢語対和語のものや、和語どうし、漢語どうしのものもある。和語対漢語の類の中には、

こさめ／ショーウ（小雨） あきかぜ／シューフー（秋風） おもちや／ガング（玩具） たかひく／コーター（高低）

のように、漢字表記では同じ字づらの音よみと訓よみ（または熟字訓）の関係になるものもある。

このような同義語が個別的にでなく、体系的に存在している例として、現時点を基準とした日や年の序列をあらわす系列語を次に図示してみよう。（三つ以上前やあとは省略した。週や月をあらわす語にも多少あるが省略する。）これらのばあい、たとえば「去年」と「昨年」のさしている時間の範囲の点ではまったく同一であって、指示的意味における同義性は完全であり、純粋に文体的な対立による区別である。そして同じ対立がこの系列の語にひろくききわたっているのだ。

日常語	文章語	その前 ←	前 ←	今 →	次 →	その次
日	オトトイ オトツイ	イッサク ジツ	キノー サクジツ	キョー ホンジツ コンニチ	アシク アス	ミョーニ チ アサツテ ミョーゴ ニチ
年	オトトシ	イッサク ネン	キョネン サクネン	コトシ ホンネン	ライネン	ミョーネン サライネン ミョーゴ ネン

同義語は発生しても、長く共存することはできず、一方が廃用に帰したり、意味の異化（dissimilation）が起こったりするのが普通だといわれる。この原則は同一の文体レベルにおいてはともかく、ことなる文体レベルまで含めてやや広い範囲で考えるばあいには、必ずしも成り立つとはいえないのではないか。

日常語対文章語の対立は、2分法的な性質のものではなくて、文章語的な性質の程度の強さはいろいろであり、質的にも一様ではないであろう。また、現代では文章語的な語が一般の人々の日常的な会話などにも流れ込んでくる傾向がかなりあるように思われるが、それはそういう語の文章語的な性質をわずかずつ弱めることになっていくであろう。

日本語の文章には歴史的に強固な文体の対立があった。明治20年代からの言文一致運動によって、ある程度まで言と文との接近が実現されたとはいうものの、日本語は今日でも話しことばと書きことばの差が大きいといわれている。そして書きことば的な文体を成り立たせる大きい要素として、文章語的な単語が数多く存在し、その中のあるものは日常語で意味が同一に近いものと同義関係をなしているのであろう。書きことば的な文体を成り立たせる必要が、こういう同義語を逆に分泌させることもあったのではないか。

上にあげた例の中にも、文章語のほうが現在ではあまり使われなくなったり、すたれかかっていたりしているものがある。文章語に多い漢語に関しては、第2次大戦後に漢字制限に伴って新聞社などが行なった「言いかえ」の努力などの人為的・意識的な力の影響によって影がうすくなってきたものもあるだろう。しかしそれだけではなく、文章全体の文体的な対立が時代の大勢として弱まってきて、その結果おのずと文体的な区別を主な存在理由としてきたような同義語の存在の根拠が弱まって、ある程度淘汰されてきたという面もあるのではなかろうか。また、社会一般、とくに若い年齢層における漢字漢語に対する知識の低下などもその要因として働いているだろう。

2.2 日常語対あらたまり語

文章語と関係の深い概念として、「あらたまり語」というものを考えることが、ある種の同義語の弁別に必要になる。文章語は言語的文脈に重点をおいた見方であったのに対して、言語外的な場面との関係からみた概念である。まず具体例からあげてみると、

よる／やぶん（また夜、電話するよ／夜分お電話して恐れ入りますが…）

さっき／さきほど あとで／のちほど このあいだ（こないだ）／せんじつ

のような、時に関する体言の例があり、2.1に文章語の例としてあげた日・年をあらわす語もみな、あらたまり語としての性格を兼ねそなえている。（あらたまった時の「ではミョーニチうかがいます」のような言い方を参照。）

どう／いかが（味はどうだい？／お味はいかがでしょうか？）

ちよっと、すこし／少々 ほんとに／まことに こっち／こちら

などの副詞・指示詞も同じ性質をもった対立である。

以上の具体例から明らかなように、ここであらたまり語と呼んだものは、日常気楽に話すような時によく使われる日常語に対して、あらたまった場面で相手を強く意識し、ていねいに話しかけようとするばあいによく使われる語である。したがって敬語ではないが、ていねい語に類する機能をはたす語でもある。

同じくあらたまり語と考えられるが、上の類とやや性格の違う1類もある。

すぐに／ただちに（これより直ちに討論に移りたいと存じます）

こう／かように　こんなに／かくも

のような類で、たとえば1人対1人の話では「はい、直ちに持ってまいります」などとは言いにくい。文語の助詞の中には、

で／にて（当店にて発売いたしております//6両編成にてまいります）

や、「から／より」「だけ／のみ」など、多人数に対する公的な場面では現に盛んに使われているものがある。これらの語は文章語的な性格が強く、多人数に対するあらたまった話し方に適合する性格を持っているのであろう。

（付記）同義語の記述項目としてあげようと予定したものが、紙数の関係でかなり残ってしまった。語の文法的特徴・結語法・音形式・表記形式などについてはまったくふれられなかったが、文献1で筆者の担当した「類義語の種々相」（P16～31）にわずかながらふれてある。なお、注や参考文献も紙面の節約上必要最小限に止めた。

（注1）同義語はその指示対象の範囲が重なり合うことを必要な前提条件とするべきだとの考えが当然あり得るだろう。典型的な同義語はまさにその条件をみたと考えるが、外延は一致しなくても内包において著しい共通部分のあるものも一応同義語的なものとして扱ったばあいがある。たとえば「旅館／ホテル」の外延は一致しないが、〔建造物～組織〕〔営業用〕〔旅行者を宿泊させる〕などの要素は2語が共有し、「ホテル」には〔洋風〕という要素が加わったものとみて、例にあげた。

（注2）文献4の「動詞の意味と文体的性質」の章は、同義的な動詞で日常語と文章語が対立しているばあい、文章語のほうの動詞のあらわす意味は、①大規模なことながら、②公的なことながら、③抽象的なことながら、④よいことながら、という方向にかたよっていることが多いことを用例にもとづいて指摘している。なお、小稿の「文章語」の概念はこの論考や文献3の規定にしたがっている。

(注3) この問題に関係のある小調査の結果が文献1のp128~150にある。

(文献1) 国立国語研究所報告28『類義語の研究』(松尾・西尾・田中担当, 昭40)

(文献2) 浅野百合子「類義語考」(日本語教師連盟『たより』に昭43から連載し、
現在「その7」に及ぶ。なお、途中から『たより』は『日本語教育研究』と改名)

(文献3) 徳川宗賢・宮島達夫編『類義語辞典』(東京出版, 昭47)

(文献4) 国立国語研究所報告43『動詞の意味・用法の記述的研究』(宮島担当, 昭
47)

(文献5) 三宅鴻「英語から日本語にはいった外来語」(『英語学と言語学<前編>』
所収, 昭47)